

## 直江兼続と直江姓について

直江 智成（高12回）



「直江兼続」について書いて欲しいとの突然の原稿依頼。何故私が。越後の偉人「謙信・兼続」については歴史家でもなく、ましてや学

究でもない小生如きが書くなんて無茶な話。

2009年度のNHK大河ドラマに直江兼続を主人公とする、作家火坂雅志の『天地人』が決定してからというもの、「直江さんと兼続の関係はどうなんですか」という質問をずいぶん頂きました。今までも話のついでに問われた事はありましたが、気にするほどの事はありませんでしたが。

さて依頼の本論ですが、先にもお断りを致しましたが、小生は歴史家でもなければ学究でもない。直江津という地方の小都市の小さなお寺の住職に過ぎません。「直江兼続」については多くの作家、歴史家がいろいろと書かれておられる中でも、近年は地元の居多神社の宮司・郷土史家、花ヶ前盛明氏が「謙信」に引き続き「兼続」を取り上げて発表されています。基本的には歴史の年次による動きは氏の書物に依拠しながら述べてみたいと思いますが、やはり小生の名字の「直江」との係わりにも触れないわけには参りません。

そもそも兼続が上杉謙信・景勝二代にわたって仕えたというが、その上杉家がいつ

頃から春日山城を根拠として越後を統治したのでしょうか。また与板城に直江家がいつ頃から入ったのでしょうか。歴史家の指摘するところでは、信綱・影綱・親綱・梶山一徳の代まではさかのぼって確認できるとは言われています。

この直江家の出自は、直江津であると言われる。直江の郷、直江の港から直江津となったと言われる。「津」即ち港は今の直江津港ではなく、天然の良港として位置づけられた郷津を意味するらしい。ともあれ直江の郷に在って相応の権力を持った一族が「直江」の姓を名乗ったのが始まりであろう。

上杉家が越後を統治していく中で、直江氏はやがて上杉家に仕え、領域の広がっていくに従って与板城を預けられ、何代か続いていた影綱の代に、後に兼続と再婚する事になる「お船の方」が信綱を上野国長尾家から養子として迎えるも、家老同士の争いに巻き込まれて事故死をしたという。いまだ子どもも無く、それでは歴史のある直江家が絶えてしまうというので、早くから謙信の甥景勝に仕えていた樋口与六（加冠して兼続。父兼豊の妻、即ち母は直江家、影綱の妹という説もあるそうだが。すると従姉弟ということになる。まあそれは無いだろう）を直江家に入婿させたのである。

兼続は1560年、坂戸城主長尾政影の家臣惣右衛門の長男として誕生。弟に与七がいる（後に小国家に入り名は実頼、やがて大国を名乗る。晩年に高野山に出家したとも聞こえる）。5歳頃より謙信の姉、景勝の母

仙桃院に才能を認められ、6歳年長の景勝の近習として仕えたという。

独身を通し子供の無かった謙信は、景勝の父の死後に坂戸城より春日山城へ景勝を養子に迎え入れることとなる。その後上洛を直前に控えて急死した謙信の跡目を争って、1570年に政略的に北條氏より養子として迎え入れていた輝虎との激しい「御館の乱」が起こるが、兼統らの働きによって辛くも景勝側の勝利に終わる。

そして越後安定に至り、豊臣秀吉との親交を深める中、上杉家の実力を認め、会津120万石への移封が成される。この時家老の職にあった兼統は30万石を与えられ、米沢城を任せられる。家老にして30万石とは驚くほどの石高。それ相応の人として内外共に認められた証であろう。秀吉をして「天下の政治を任せられるのは兼統など数人に過ぎない」と言わしめたという文言も残っている。それほど文武両道に通じた智将であったのだろう。

しかし秀吉の死後、血と血で争った覇権は関が原の戦いによって東軍徳川家康の勝利に終わり、戦国時代を終えて徳川15代300年という平和の時代を迎えることになるが、上杉家にとっては厳しい時代への入り口に立つことになるのである。

景勝・兼統は秀吉との信頼関係から、嫡子秀頼を立てるべく、派兵こそしなかったものの西軍側に足を置いての姿勢を貫いていたのである。そのため將軍職についた家康からは、今後服すべきこととして出頭を命ぜられるが、ここで近年その価値を高く

評価されている、出頭を拒否する「直江状」なるものの存在が脚光を浴びている。

「直江状」は非常に長く、16ヶ条にわたって上杉家を擁護する姿勢を、負け組にもかかわらず格調高く訴えている。状況次第ではお家お取り潰し、断絶もあり得た中で、結果として兼統の居城を以って景勝の転封先で収まった次第である。

120万石から30万石。四分の一。しかし家老としての兼統の采配により経済苦境を切り開き、小藩ながら米沢藩中興と言われる上杉鷹山までその姿勢が受け止められ、受け継がれていったと言われている。その鷹山が師と仰いだのが兼統であったという。それも歴史を振り返れば上杉謙信に若いときより育まれた「義」「愛」の精神が底流にあるのだと言われ、謙信とともに兼統の才を評価されているのである。

郷土史家花ヶ前盛明氏の著書には、既に多くの方にご案内の謙信・景勝に武士としてあるいは政治家として仕えた史実の外にも多くのエピソードが紹介されている(一々については省略する)が、中央の文化人との交流も盛んであり、漢詩や和歌、連歌にも秀でていたとも言われ、記録も残されている。また秀吉の朝鮮派兵の折には同行し、多くの書籍や銅の活字を持ち帰り、後に書籍の出版にも力を貸したとも言われている。

さて、冒頭に触れた小生の姓「直江」との関係はと問われるのですが、兼統とお船の方の間には三人の子どもがあったと言われます。長女於松、二女名前は不詳、長男

景明。しかし子女は二人とも病気により夭逝。景明は政略であると思われませんが、近江国膳所城主戸田氏の娘婿として出されます。しかし早いうちに病死したと記録にはあります。従って兼統の後を立てる者が存在しないと言えましょう。

信長、秀吉、家康と天下の覇権争いを目の当たりにしていた当時の武士の多くは、短い命を身を粉にして、領主のために血と血を流し合いました。上杉家にあっても同じであったでしょう。兼統（1619年江戸にて没、60歳）とお船の方（1636年没、81歳）のお墓は、米沢城下林泉寺の杉林の中の墓地に二つ並んで静かに佇んでいます。

そうすると小生の直江家は？となりますが、正確な記録は見えませんが…。

当寺、林覚寺（真宗大谷派）の由緒書によれば、開基賢栄は1566年の生まれで兼統より6歳年下。

冒頭から「開基賢栄は族姓直江伝十郎親氏、直江山城守と同姓にして、即上杉家の一人たり」で始まり、「上杉輝虎（謙信のこと）御卒法の後…景勝…会津へ御移城の砌、世の盛讓を思い身の浮生を觀じて深く出離菩提の志を起し…知恩院に登り…云わく『年来戦場の分野唯主命を重んじ身命を軽んじ人を殺害して家を起し身を欲立し、表には国家の為と云えども内心には子孫の栄花を求め、不仁不義の至り、殺業の罪思うに最も重し…未来の業苦を消滅して安養の淨刹を示し給え…云々』…親氏即ち弟子

となる。法名を伝誉と号す。（以下略）」とあって、一時上野国沼田郷の長源山了源寺の住職を務めた（1617年）といます。然しやがて「旧里忘れ難くして…一族の追福を勤めんと越後に来たり、春日山城の荒れたるに昔を思い…城下（高田城）に越すに…道族貴賤各々歩みを運ぶ一仏閣あり…（以下略）」と。その仏閣とは本誓寺（寺町二）のことで、ここにおいて浄土真宗、親鸞の教えに触れて『目から鱗が落ちた』として真宗に帰依（1620年）、当地に了源寺を建てるも、直ちに直江津今町（現在の中央四丁目）に林覚寺として一字を建立したといます（1633年没、68歳）。私で13代になります。

至極簡単に当直江家のスタート時点を記しましたが、開基の『伝十郎親氏』という俗名からして、景綱（お船の方の父）乃至親綱（景綱の父）の兄弟辺りと考えるのが妥当かと思慮しています。

ともあれ『天地人』という作品の主人公として「直江兼統」に光が当たり、関係する地域、遺跡に注目が集まる中で「直江、おまえとの関係は」と尋ねられれば知らぬ顔も出来ないが、とかく問われる中身は「血の繋がりを期待？されているのか、正確さを欠きながらも少しでも正しい方向に向けて真の「直江兼統」を理解して頂く一助にでもなればと思い、依頼されるままに書いてみました。合掌